

大月 隆 著

人物の裏面

29
125

文學同志會出版

人物の裏面目次

社會暗黒

人物の平安

人物の側面

地方人物の側面

婦人社會の人物觀測

新聞社員の觀測

文學者の内側

政治家としての人物



一 八
一 七
二 一
二 七
三 七
四 七
五 四

醜業社會の内側	六十一
和學者としての人物	六十八
日本刀の切味	七十五
華族の表裏	七十八
無名の密使を海外に出す	八十四
日本人物としての観測	八十八
歐州の人物	一〇〇
日本の人物	一〇五
日本美術家の特色	一〇九

教育家の表裏	一一三
紳商と云ふ人物の裏面	一二七
宗教家の裏面	一二九

人物の裏面目次

人物の裏面

大月隆著

社會暗黒

昨は功臣にして今日は逆賊と變し今日の烈人は明日直ちに君子となる……………

評者の輕薄に失するか果た社會は斯くも輕瀾なる試感場なるか

余れ近くは西郷隆盛に於て之を見る昨は逆賊たり然し今は元勳功臣の首魁として東郷の公圖に其銅像の現はるに

至る所の彼れにして若し逆賊ならば今の彼れも逆賊に相違なし彼れの思想果して義以て公に酬ゆるの感あらんか何を以て彼の首級を土に化するの要あらんや是は只其一例のみ余は凡ての事實に於て如斯評者の過失を認識す世は斯く迄も不明輕躁なるものなるか

凡て人は利己心に富めり他人を圖る皆己れの心を以て圖れり富者は財の上より人を論し義者は義の上より人を圖り悪人は己のが惡しき思想の鏡に照して亦他人を圖る豈そ人を圖るに其正確を失せざるを得んや

人物は詐欺師なり豪傑は惡人なり老子曰く大盜能く人を

制すと其言の適中する事を今日に見る余は昔の豪傑偉人を書續の上より見る然し其爲したる事の多くは人に害を及ぼしたるに過ぎずかくも人を殺したる事蹟の多くある人を以て大偉人となす余は現時の大人君子を新聞によりて見る然し今の人には皆詐欺師なりかくも計策を以て善人を苦めたる利己心に富める盜賊なりナポレオンの一代は只他人に害を與へたる盜賊事業を遂げたるのみにあらずや彼は死前に於て己れの盜賊を自白したるにあらずや今の義人紳士は國家の高祿に甘じ他を姦して肉食場裏の大豪傑として毎日成張り暮すにあらずや

嗚呼此世はと不明なるものはなし實に此社會程不公平なる處はあらざるべし

世人は皆目前の社會のみを知りて他の社會を知らず彼等の慾望には美人あるを知るのみ彼等の口には只酒肉あるを知るのみ世人の世の中を感ずるは恰も海豚の海中を見るが如し瘖せたる犬の屠場を逡巡るに少も異なる事なし直言すれば手當り次第他を害して己のか肉慾の滋食となし若し應せざれば強いても之を殺す

法律は表面の事のみを制す權者彼權者の處女を強姦す或る處に強姦したる事實あり然し彼權者之を公にせざれば

權者の罪とならず大家高樓の奥坐敷にて日夜賭場を開く然し人の目に當らざれば紳士の日夜此の處に通ふ者あるも法は以て罪となさず法は人の製造物なり故に一法律を製造すれば亦此法律の裏を發見す於是か法を利用して反て法の爲めに惡をなすものあり北條氏の門を通りたる一老僧あり曰く北條氏將に亡びんとすと市吏之を賣めてなれば彼れ答へて曰く余れ以前此處を通りたる時只三四條の法制あるのみ然し只今之を見れば其法に十倍すと夫れ國家の繁なるは國家滅亡の兆なりと

東京の貧賤生郵税なしに郵便を送る便法を發見せし事あり

り一日此書生の處に端書來る彼れ其返書錢なし依て來書
を讀たる後其全面を墨にて黒く塗り此内へ朱書にて己れ
の用向きを認め而して後此端書に附箋して曰く此端書請
取人不在故返却すと書して郵便に投せり後此書は再び發
信人に返りたる故發信人は其返事を見る事を得るに至れ
り

社會の眼は法律なり此不完全なる法律は人間社會全体を
見る處の役目をなす豈ろれ此内にある人間を見る事を得
んや

社會の公目は法律に觸れざる人を社會の普通善人となす

法を犯す人に法を活用する人あり法に従うて法律を悪用
盜應するものあり法に従ふの表面的觀察によりて何んぞ
其人を知る事を得んや化學者は人の化學的腦髓の發達程
度を見文學者は人の文學的理想の發達を見て以て其人の
好惡を決す

此不公平なる社會の不完全なる人物が猥りに古今の成敗
を論じ他人の人物を批評して歴史を作る是れ其間違の起
る源なり

斯く此世は間違を以て充たせり此間違ある社會を目的と
なし此社會の喝采を得るを目的となす其不明實に笑ふに

堪へざるなり如斯なるか故に社會の事は皆暗黒なり皆不明なり恰も禽獸社會の群の如し

人物の平安

人余を譏りて悪人なりと云ふ斯く若し云ふと云ふは其云ふたる聲は余の耳に聽ゆ然し余れ善人ならば其間違の評の爲めに余れの悪人となるの理あらんや余は同じく善人に相違なし

人黒色の眼鏡を懸けて他人を見て曰く汝の面は黒色なりと然し余れの面貌白紅色ならば此黒色眼鏡の評者の爲めに余の面の黒く變したる事なし然らば人の余を批評する

は只聲のあるのみ之が爲りに豈余れの價値に變動を生る事あらむや

社會は暗黒なり暗黒の處にありては五色皆黒し然し皆黒さは眞の黒さにあらず暗黒なるが故に黒く見ゆるのみ若し日光の照すあらずば黄金は黄色を發せずして止まんや光を發する事黄金の本質にあらず光を發せざるも黄金は黄金なり黄金土の中にありたるが故に鉛に變ずる事は少もなし北海道の砂金すら時ありては土人の發見によりて日本銀行の金庫に入るにあらずや

馬鹿は何時迄も馬鹿也人之を評して賢人なりと云ふと雖

も馬鹿の化して賢人となるの道理なし

一〇

世の万物は實在なり實在するものは實在せり白きものは白し黒きものは黒し之れ少も偽りな又亦他と關係もなし關係ありても白きものは白く黒きものは黒し

人物は事情の如何に關らずとて迄も人物なり彼れに粗衣を被らし彼れに粟飯を喰はして臺所の片隅に置くも彼れの語る處は金玉の言たるべし

不人物に紳士の美服を被らしめ山海の美味に飽かしめて高臺の金殿に置くも雖も彼の吐く處は他を笑はしむる原料たるに過ぎざるべし

世の多くの男子は美婦を好む只外貌の美を需む然し外貌の美なるもの心意の美なるに限らず只好男子を餌食として己のが肉慾を充さんと希望する如き淫婦を以て充せり今の男子の妻を需むるや以下の如し彼れは女の健康なるものを下等となして賤み哀れなる病人然たる柳腰女を撰ぶ果して此女の生む處のものは虛弱也今の男子は女の血統を撰まらずして金錢の多少如何と鑑別す金錢如何に万能力ありと雖も急に人間の志節を製造する處の權能を持たず

婦人社會の人物は古今ともに醜貌者にあるにあらずや

(雪岳女子を除く)現今の慈善婦人には一人も美人は居らざるにあらずや

今の女子の良人を撰むや以下の如し彼れは何誰の子息なり余れ彼れを夫に欲す彼れは美男子なり故に余れ之を欲す彼れ洋行せり故に余の夫に適す彼れは大學を卒業せり故に余れの良人に適す彼れは金銭の散り方能し故に後來の良人に適す曰く何曰く何と彼等賤女の云ふ處は皆如斯し彼等は之を口には明に云はず然し彼女等の心底にある處の大希望は皆如斯し斯かる思想を持てる夫婦の内より好人物の生るゝ道理あらんや後來大發明家の起ると預期

せんや日本現今の嫁入りは犬猫の嫁入りの如し亦共に交際するも犬猫の交際の如し犬猫は魚の骨を多く食し人間は魚の肉を食するの差あるのみ新聞紙の報導にすら實親子の間に於て姦通する程に墮落したるにあらずや實に犬猫社會に酷似する處の現實を社會に呈したるにあらずや

世人は肉慾の爲めに纏身爛れたり殆んど不倫の不徳なると云ふ辨別力迄磨き盡せり無論良心の領分迄肉慾磨きの惡毒は流れ込むに至れり

全社會は此有様を淫せたり皆適の君子は注意して此等の

社會と交際を組にすべし君子以上の人は宜しく改革の事業を採るべし

如何となれば現今神阪地方に行はるゝペスト病の如く已れに少しにて環玠あるときは其翹点より遂には思はざる罪を犯す事あるべければなりペストの微菌は人身に少しにても疵所のあるれば其口より病毒に感染して人命を絶つと云ふ

ペストの流行するときは交際を謝断す今日の社會へも交際せざるころ尤無事なる事となす

一國の不幸は戦争より大なるはなし然し此害悪なる戦争

より尙恐ろしきものはコレラ病及びペスト病の流行なりとす然し之よりも尙尙戦慄すべき事は人心根底の腐蝕したるにあり人心の爛したるものは死人なり身軀の動くは只獸慾心の驅肉にありて動くのみ少も人間として動くにあらざるなり

斯く觀し來れば日本國は皆死人なり死人國なり此内生きたる人なきにあらず然し極少數のみ昔時ユダヤ國に於て多くの骸骨に向ひ預言者ダニエルの祝福ありたるとき此多くの骸骨は皆活きて歩行せしと云ふ比喩談あり現時余か國にダニエル、エレミヤの如き預言者の起るにあらず

んば國家の滅亡目前に迫るを見る

一六

余れ友人の處に至る客室坐上の欄間に只獨り樂むと書きたる額を掲ぐ余は之を見て歎又久うす余は余自身の事を觀し余は不能者にして世を改革するの器にあらず思想に於ては改革せんと欲するも其權能なし余も亦獨り道を樂むの外一事をなす事能はざる死人なる乎と

獨り道を樂んで社會を害せざるものは普通の人なり道を教へて世の爲に身を犠牲に供するものは聖人なり道を輕るんじて社會を害するものは國賊なり吾人は聖人たる事を得ざるも他を害せざる事を以て誓言せんとす是れ人生

の本道にあらずるも能力足らざれば止む事を得ざるなり

人物の側面

ナポレオン曰く策圖は豪傑の常なりと此語は余の所謂豪傑偉人を表はすものにして之より云わんと欲する事は此事なりとす政治家は必ず豪傑とは評せざるも豪傑は必ず政治家に相違なし抑も政治家なるものは計策により社會を料理する技術にして道德問題や論理問題の外に立ち荷も一の異なる事實起るときは之を料理するに當り其計策の偽善なると極悪なるとを問はざるなり只其起りたる事實

一七

の決着を果せば夫れにて其目的は達せられたりとなす故に其方法恰も投機師の如く危険なる處法と云はざるべからず譬へは陸海軍人にして餘り墮落に失するときは隣國に無理に戦端を開き其起りたる戦争によりて軍人の放蕩心を制するが如し

道徳家の事を料理するは其目的の達せざる事は既にあらん然し其目的の達せざる爲めに少も他を害し危険なる事はあらざるなり政治家の原理は之と異りて一度其目的をあやまりたるときは他を害し甚だ危険なる事を制するものなり近時日本の有士か朝鮮馬山浦に於て露國の建てし標

柱を抜き取るものありしと聽ゆ此事眞なりや否やを知らずと雖も若し眞なりせば彼等の胸中には余の所謂政治的觀察を以て爲したる事なるや疑を容れざるなり

如斯古今を通して豪傑と云はるゝ人の事業は皆如斯故に余は豪傑は悪人なり少くも詐僞師にあらざれば投機師たるに相違なしと論告するのみ

豪傑の事業は男子終身の事業を一事に賭して決行する詐僞的行爲にして君子の決して爲さざる處なりとす爰を以て君子は漸次の改革を施し豪傑は火急の改革を施す

君子は己のが事業の成効を見て名を需めず只道の爲に之

をなす然し豪傑は只己れの名譽心に驅られて事業を起す
君子の行爲は善意にして豪傑の行は慾望なり

世人は如何に暗黒中にありと云へ慾望を充したる心意惡
事を決行するの豪傑たらんことを欲して他を益し己れの
生命を演述する聖賢者たらん事を欲するものなし

己れ直接聖賢者たらん事を欲せざるのみならず只之に似
んことをも需めざるを常なりとす甚だしきに至りては世
の所謂豪者ならざるものを指して之を笑ひ且つ之を譏る
只に之を譏るのみならずして善者君子に害を興ふ實に此
世は末になりと云はざるべからず

地方人物の側面

晝は料理屋に遊び夜は深く狹巷に放飲す習是れ地方の人
物なり自治制の行はれてより以來地方の政見は多く善者
の面前に於て決せらる善者の退席して後は土木費の秘密
案も矢張り此處に於て決せらる

地方の人物なるものは己のが地方に勝手なる議論をなす
の外少も國家的政見を有するものなし若し國家的政見を
有して少しにても國家有用の義を提出するものあらは地
方の人民は斯かる卓越の人物を容るゝの知識なし今の地
方政治は恰も無知なる愚童の利器を擔うて無知なる群衆

の間に遊ふに等し

三三

彼等は國憲より附與せられたる自治の權利を解するを得ず只是を玩弄して己のが利益のある様曲解し愚民の知覺を鈍らしめ地方の溢益を集めて放蕩費に當てざれば彼等の職分はなきものと考え居れり彼等は如斯事の惡なる事を知らざるにあらざ然し彼等の慾望心は各自の理性を包みて正義を執行せしめざるに至る

彼等は地方にありて政治家となることに熱中す然し彼等の心には地方の善政を議し立憲の本義を明かにせんと力を盡すもの少し只己れ地方の主要なる地位を有し運動費

を貪ぼり賄賂を取り酒地肉林の放逸を極めんと志すのみ愛を以て若し其目的を達する事を得ざれば他の同僚を害し政治的法螺を擔ぎ出して義者に中傷を試む純然たる壯士と變化せざるはなし

自のか利己心の地方に行はるゝを地方自治の目的となし立憲の精神に遠ざかるを以て本志となす仲には立憲とは如何なるものなるかの辨別なき人物の加はるありて甚だ地方の爲に氣の毒なる人物の代表せる處あり

凡て人は己れを知らざる人程困入るはなし况んや如斯人の政治に嘴を入るゝに於てをや

三三

既に己れを知らざる人の何も知らざる人の首席を占め之に加ふるに法律も國体も政治も立憲の何物たるかをも知らざる人の公共事業に御盡力せらるゝに於てをや余は餘りの氣の毒故に御盡力と云ふ

今の世の中には下等人民程社會に益するものはなし少くも軍力船頭百姓の小作人等に至りては國家は實益の上より勳章を與ふるも不可なしとなす彼等は只額に汗するの外何事をも知らず若し此汗を毎日流さざれば妻子を養ふ事すら出來ざる仕末なり

此世に道を修めざる知者程危險なるものはなし彼等の結

律思想は惡を執行するの助力たるに過ぎず如斯人の智識は惡を曲論して善なりとするの用に供せらる此の故に彼等若し其過失の發露せらるゝや其實只其人壹人に止まる事なく其人の言語知識の應用せらるゝ處の全体に其損害を蒙むらしむるに至る現今地方自治制の進まざる故なしとなさんや余れ役場の小使に聽く彼の役場に於て何等に斯く多くの紙と筆墨を用ゆるか余れ其精算をせしに毎日墨一打宛紙は一日に五十帖を費やすと

此役場は地方の小役場なり小使の歎聲は役場吏員は盜賊なりと云ふの換言のみ

筆墨紙は少額なり然し彼等の志は此少額なる筆墨紙をのみ盗むに止まらず若し人民と上官の知らざる事は成るべく多額の者を探りて着服せんと欲するなるべし之れ小事に正しからざるものは大事にも正しからずと云ふ聖言の示す處なればなり

或る地方に於て鐵道土地買上の頁土地収用規則を用ひたり其節土地評價人となりし地方の有志あり何故なるかを知らずと雖も彼れか富二三年間に三十倍し彼れは此金を以て放蕩を重ね其結果瘡毒を惱み今は面の不具を鼻に残して彼れが金錢の出處を世に廣告しつゝあるにあらざる

や

義によりて集むるものは義によらざれば散せず不義によりて集めし財は亦不義によりて散す此語は豈ぞ獸欲の君子に價なしとなさんや

嗚呼世は不公平なるかな惡しき人は人の上に立ち正しき人は車を曳く天道是が非か將た天の人に與ふも幸福は唯各自思想の平安のみにある乎其他には幸福の需めらるゝ餘地なきか

婦人社會の人物觀測

當時婦人社會にも各所に人物の表はるゝあるは、余が國

の爲に大奮すべきの發達なりとす。或は慈善事業を廣會するものあり、又は婦人大學の建築に盡力するものあり、中に矯風事業の爲めに獻身するものさへ起るに至れり。婦人は社會の勢力なり、婦人死せば社會は冷却となり、婦人泣けば之と共に社會は活動するに至る。婦人の冷熱によりて社會死活の分水嶺とは、筆を採りながらうゝるに婦人たる人物を觀測すべきの要ありとなす、婦人にして若し男子を待たざれば事業をなす事を得ず、男子亦此婦人の熱心なる勸めあるにあらざれば、到底公共の事業に資を投ずる如き高潔の思想を持てるもの少

からん、之に反して如何なる放蕩のものと雖、一度此婦人の熱涙に激せらるゝときは、鐵腸直ちに、碎けて、一時は殆んど本心に歸らざるものあらざるべし。

現今吾が社會の改革事業は、婦人の起るを以て尤も好都合となす、然し兵隊と鐵道事業は、男子の粉骨するものあらざんば、事業は擧がらざるべし、其他の社會教育事業に至りては、婦人の熱血は實に前述の勢力を以て其感化を及すに至るものなり、婦人の一颯一笑は、傾國と開國との大動機を有す、

斯かる好都合の位置にある婦人は、彼等自身にすら其天

資の己身を解せずして婦人は只眉毛の娥媚なるを以て、柳腰の婀娜たるを以て、食事の少きを以て、猥りに男子に柔順なるを以て、天職なりと理解せり、是れ日本現今婦人社會の常態なりとす、

何を以て著者は斯と云ふか、余は唯現今現在婦人の精神の傾く處によりて然なりと決言するのみ、矯風事業は美なり、然り此事業の熱心者は皆獨身者なり、余れ一日彼等につきて其意志のある處を見れば、夫を持てるものを意氣地なしとなし、兒を持てるものを氣の毒となし、人間は夫妻の家庭的快樂と云ふものを少も知らざる人の

み、之を以て此等婦人の資性は男子化したる婦人にして情濃かなる慈愛的血涙は彼等の身邊より、溢れ出でざる蹟あり、如斯事情にて社會を化せんとするも、彼等天資の資格に於て既に欠くる處あり、到底其目的を達する事能はざるべし、彼等は己のが天資の情火を以て、男子を化せんとするに出でずして、自身が男子となりて男子の仕事をしんとす、是れ彼等矯風の婦人として、事業を擧げ能はざる大原因なりとす、

婦人は名譽心に富む事男子よりも甚だしきとなす、男子の名譽世に發表する無罪の名譽心なれども、婦人の名譽

心は隠然的名譽心にして、恰も二三月の地下にある竹の子の如し、如何にしてか地上に出でんと用意の周到なる油の如く、其運動の細かなる男子の及ぶ處にあらす、男子は目的の達せざるあるも、亦思ひ直して他方面より運動に着手す、然し婦人若し一度失敗するときは、思想忽ちに究し、又以前の男人たる事を得ず、此時若し男子の之を知りて、婦人を慰むるにあらすんば、彼の如き境遇に陥りたる婦人は、或は一死以て余が恥を包むに至るべし、

婦人社会にして公共事業に熱中するものあり、此或國際

は先づ東京の上等社会の人なり、彼等の運動する精神を見るに、彼れは何、彼れは平民、彼れは小吏の妻、夫故に余が事業の仲間入りは出来ずなど、云ふを知る、慈善事業なれ、孤子教育なれ、貧民教育なれ、普國民的事业なり、然るに人の發起人なるものは人物の上等社会の婦人にあらざれば、共に其事業に相齒せざるに至る、爰に熱心に其事業を助けんとする婦人ありと雖も、拱手傍觀するの傾あり、爰を以て其事業の發達も思はしからず、彼等は文明的教育の精神に欠乏する處ある故に、精神的社會平等の主義は、到底解し得る處にあらす、中には一

人位の理解者有りと雖も、是も唯理想上の平等主義者にして、感情の上迄の發達を遂げたるにあらず、是等の性は恰も蝸牛の角の如し、少しにても等彼の御機嫌にさわる事あるときは、直ち輿に引き込み、爲し始めたる事業も擲けうつ事あり、教育ある男子等は此事を知るか故に、彼等運動法の宜しさを得ざる事を知らざるにあらずれども、若し其仕方 of 惡しき事を卒直に指摘せば、直ちに蝸牛の角と化するを恐れ、彼等の仕様次第にして傍觀するの傾きあり。

唯今余が諸婦人大學の設立を望む貴婦人あり、余は國に

婦人中學を希望するなり、婦人の中學校は全國に一もなし、唯或る地方に宗教學校の建られてあるのみ、如斯國情なるにも係らず、直ちに婦人大學を建つ、彼等は先づ此學校の生徒と教員を何れの處より要めんとするか、教師は男子にても宜しとしても、生徒は誰か先ちて生徒となるや、故に先づ婦人中學を建て、其後大學を建築すべし、

婦人は大學の卒業生にあらずれば子を生まざるにあらず、日本婦人は三十年以上獨身にて経過すれば、彼等の姿色に於て男子化するのみならず、彼等の精神に於ても、

兵隊的となる。余の觀察は現今の日本婦人に大學校を卒業せざれば、日本の發達に害ありとは認むる事を得ず。大學は専門の學を修むる處なり、日本には婦人の専門學者を要せず。夫よりも第一必要として需むるは家庭の整理法と、交際の方法を知得する婦人を第一需め居るなり。

婦人の癖に大學の設立などを現今に陳ざ立てるは必要なりと云ふ、實際に迫られて云ふにあらず、唯主張者の精神を五百倍の顯微鏡にて見るときは、唯名譽心かられてなり、婦人が男子たらんとするにあり、男子と對等

の科學的知識を得んとするものあり、

彼等兵術を學びて兵隊となり得るや、彼等理學を學びて工場世話役となり得るや、彼等法律を學びて能く判官たる事を得るや、醫學びたらば或は眞似は出來得るに相違なし、然し眞の用は日本になし。但し若しありとするも、若し子を生まば彼等か習ひ得たる事は、其用ひ場を奪はるべし、止めよ止めよ、須らく早く架空の妄想を放棄すべし。

余は吾か同胞の姉妹に忠告する先進の如し、

新聞社員の觀測

新聞は國人の主腦たり。新聞は社會を怒らしむる事を得べく、泣かしめ笑はしめ得べく、若し國人の甚だしく眠るときは、亦起さしむる事を得るなり、新聞は恰も人身に於ける血液の如し、人体の血液は人間の体内至る處に回りで、其巡回の速かなる事電氣の如し新聞の國家都郡村舎に至る限なく、一同に回りにて萬事の國情を報ず、吾人に座しながら、毎日愉快を興ふるは新聞なり。幽鬱を慰むるも亦新聞なり、吾人に雅況の趣味を興ふるもの亦新聞なり、其他國家万般の事は、一日の内能く全國全地に渡りて殘る處もあらざりき。

新聞は社會の命脈生命なり、命脈にして止むときは、社會の活動も此時に止む、

新聞は國家の教師なり、新聞を讀まざる人は、社會教育を受けざるの人なり、新聞は社會の報導者なり、之を讀まざる人は、聾者と以て異なる事なし、

新聞は社會の眼識なり、之を見ざるものは、盲者に等しかるべし、

新聞は家庭の教師なり、無教育の人も新聞教育を受けて國家の代議士となりたる人あり、

斯く新聞は主要なる讀み者なり、然るに或新聞に至りて

は、此性格を欠き、甚だしきに至りては、反て國家の反對なる思想を報じ、右の事を左と報じ、善人を悪人と報じ。慈善家を収斂家と報じ、馬鹿の提燈を持ちて愚者を賢者の如く報導する事あり、如斯に至りては國民は此新聞の爲に偽かれ、正義を不正義と信じ、愚者を賢者と信じ、有る事を無き事と信じ。國家の命脈は此の處に絶せられ、其害の及ぶ處は、効能の勢力に反對して、其程度より尙甚たしく及ばすものなり。

斯かる新聞を読むもの、心は狼れ氣脈相異り、思想賤しくなり、不平のみを以て社會に供するもの多く起り、國

家は之と共に禍機を引起し遂に滅亡するに至るべし、

新聞社の社會に對する責任如斯大なり、新聞社は筆を以て人を殺し、又は人に生命を與ふるものなり、人の生死は國家の生死を來し、國家の生死隆興は、新聞社の生死隆興によりて來ると知るべし、新聞の責任の重大なる事既に如斯、

然るに今日の新聞社の内側は、社會公共の爲に筆を操るもの甚た稀れにして、只自己の黨派精神の中興に向ひて筆鋒を操る、此の故に其各自の黨派には忠實なるも、國家全体の上より見るとは、甚だ感心せざる個ありて、

新聞の責任を代表せざる向あり。

此邊尙は恕すべき處ありと雖も、甚たしきに至りては、
己のが名譽心を中心となし、若し己のが名譽に係りあり
たるときは、事情と道理の如何に係らず、筆の先任せに
曲論して、憚からざるなり、事茲に至りては或る局部の
保護者たるに止まり、國民へは寧ろ害を興ふるの効能あ
りて、彼等か天任を盡す事能はざるべし、社會の發達せ
ざる今日の日本にありては、新聞社を輕遇し、新聞を採
るもの甚だ少き故に、新聞社は之が經濟に大困難を來す
茲に於てか金錢の出處を政府又は黨派の保護に假りて、

其經濟を維持するが故、中には不偏獨正の論者ありと雖
も、勢其權者の鼻息を伺ふて、論筆を決する傾きあるも
今の事情として止むを得ざる次第なり、
此種の新聞記者に至りては、尙は恕すべき處ありと雖
も尙は甚たしきに至りては、己のか放蕩の資力に窮し、
之れか負債を償はんが爲めに、人の惡事を無理に忤はき
針小棒大の事實を連載して、多額の金員を貪り、之を以
て己のか過失の償ひをなすもの、都會の新聞社にありと
聽く、近くは横濱の事實に於ける、天理教會の事實に於
ける、世人は之を今に尙は肥臆するにあらずや、如斯過

矣に陥るは、新聞社其物の責にあらざるも、斯かる不徳の記者を雇聘する同社主任者の不注意は、決して免るべからず、

新聞社の正確なる事實を報導せんと欲せば、社會の裏面に深く入り込みて事實を探らざるべからず、社會の裏面を探ぐれば至りて罪惡陰險の充てるを常となす、此の陰險、罪惡の裏面社會に深く入り込みて事實の真相を探らんとするものは、人に卓越したる人物ならざるべからず、若し此任に當るものに普通の人物を用ゆるときは、裏面の罪惡は、此探報の任にある人物を呑み盡くして罪

惡に同化し、遂には此人物は罪惡の保護者となりて、國家を無視し、新聞報導の責任を過まつ事比々然りとなす、非常の好人物は多額の報酬を拂はざれば新聞社に入らず、新聞社の現在は、何社も困難の經濟を探る事情なれば、先づ今日は間に合せの人物を用ひて、此重大なる責任を負はしむるは、只今全國一般の有様なり、爰を以て是等の人物は皆罪惡を買収せられ、罪惡の奴隸となり、罪惡の保護者として筆を探る、之を最も大なる新聞社の過失なりとす、

巡查劔を帶す、之れ人を保護せん爲めなり、若し此劔を

抜いて獲りに人を殺さば如何、其害の及ぶ處少々ならざるべし、善者の保護者若し變じて罪惡の保護者とならば、巡査の劔を抜いて國民を逆殺するに等しかるべし、斯く種々なる過害の新聞社會に起るは、新聞記者が己の天職は國家の重鼎なりと云ふ自重心を永續せざればなり、彼等は其の責任の大なるを知らざるにあらず、然し今日の國情より人民も政府も新聞記者を待遇する速記技師を以て待遇せり、甚だじきに至りて醫生社會のゴロツキ、或は壯士を以て待遇せり、於是か彼等の節操は二三年にして脱落し、遂に無節操の速記者と墮落せるは甚

なむけれ

文學者の内側

今日の文學者として社會の人に彼是れ言はるゝものは、小説を呷する一部分の人にして、小説を言はざるものは文學者にあらずと認識せり、世人文學者と云へば、小説家を云ひて其他に及べざるを聽かず、吾れ之を聞く、文學者は廣き意味より云ふときは、宇宙の解釋者なり、天地の道理を筆紙に字を以て描す職分なり、恰も畫工の形を以て天地を描すか如し、

文學者は天地の意識に神通したる人にあらざれば其資格なく、文章の巧拙文字の剛柔少も文學者としての資格問題に係りなき。唯須らく意識の神聖なるを以て本職となす。

今の社會は濁流社會の人情に明通せざれば、文學者の本能なしとせらるゝ故に、大概の大家は少くも此邊りの音信は體かに卒業し居るに相違なし。

余は文學者にあらずして本賣りなり、故に本を賣る爲め毎年二三回は必ず九州より北海道の間を回る。余の著は多く此道中の瀛車中にありて筆記したる偶感なり、之を

以て一種の本賣歴史と云ふも宜しきものなれば、何も角も口より出まかせに書くを以て余の道樂となす。余は東京の土地に毎日窮簷に机に向ひてゲーラーや、ミルトンセキスピヤ、の本の前に坐する事を好まず。此書は鹿兒島より四國の間に於て、昨年十二月より一月の間に成りたるものなり、唯此本を書する爲に少しく忠實なる事は、瀛車に乗り過したる事、夜分旅館に徹夜したる事の二事あるのみ。

扱自分の事は爰に筆を擱き、東京の大家先生の事に及ぶべし、今の著述の大半は何々文學博士の記名あると雖も、

彼の大家書したるものにあらず。又書せんとするも今日の博士は、舊人物にして大概無能なり。朝寝と酩酊が彼等の専賣にして、社會を活動せしむべき文章を書くものは少し、大概は熱心空に溢るゝの無名なる人ありて之を草し、其原稿料の半分を博士に送りて其名を假る、博士は此金を以て冬は外套を新調し、夏はアイスクリームを飲む、余も或る教科書を起草して名を假らざれば教科書にならずと書肆に云はれし事あり、幸に余は博士に知己少き故、學名借用料を拂ふの都合に至らずして今日の本賣りに變化せり。

今日の文學者は餘り容易なるか故に、眞の文學者の出づる道理なし、湖處士は歸省によりて文學者となり、紅葉は三人妻によりて大家となり、其他の大家も皆一冊貳十錢の雜書を著したる爲め、至日本國民より大文學者として尊敬するにあらずや、愛を以て彼等の學者甚だ裕福なり、中等紳士の中間入りをなすの資格を持ち、此の故に東京の文學者は皆金錢を得る容易くして、學問をするに容易からず、如何となれば彼等四五日の用筆記すれば、一ヶ月の生活費用を収入し得べき故、腦髓自ら遊惰に流れ、苦學奮書の功を積むの決心は起らざるなり、昨日も

既に如斯今日も如斯、故に大文學者の余が同胞の内より出づべき事情は先つ見出し能はざるなり、

ミルトン曰く人は困苦のとき大作を出す、日本に於ても文學者の大困難を來し、彼等が生活問題に窮するの時代來るにあらずんば、後來の人を益する程の著述は出來ざるものと知るべし、今日の小説は人の美術心及道徳心に訟ふるを主眼とせずして、男女の艶情を描き、婦女子及放蕩家の放淫心を増長せしむる媒介たるに過ぎず、故に今日は小説を草するものも放蕩にして、讀むものも放蕩なり、見るべし世間幾多の小説を讀むものを、先つ彼

等が意向の傾むく處は、余は快樂を机上に買はんが爲めに小説を讀まん、是れ其放情蕩心たるを知るべきのみ、

大家の作を讀むときは、已れを改善するの思想溢れ出で、無名の小説を讀むときは、已れを小説中の墮落主人公たらしめんとするの外、何の得る處なし、故に悪しき小説は人を殺生するの價値ありて、人を生かすの効能なし、此悪しき程の小説を讀まんよりは、寧ろ忠臣蔵や太閤記の優れるに如かずや、

人を改善せんとせば、先つ已れを改善して後に書せざる

べからず、已れ遊蕩にありて只原稿料を得んとする爲め、
賣め閉ぎに文章を作る。如何でか大作の出づる道理あら
んや。

東京の學者既に如斯、地方の學者皆如斯、是よりは今の
青年の起るありて、立脚を天地の大道に定め、志節を高
潔にして立つものあるにあらずんば、現時の文學は奈良
朝時代の文學にも及ばずして止まんのみ。

政治家としての人物

政治は國家病を治療する醫師なり。決して純粹の道理を
行ふものにあらず、寧ろ反て道理に反對して計策を施し、

國病を夫れによりて治療する本職なり、勿論アメリカの
如く計策なしに政治を施すに至るは、到底行はれ得べき
にあらず、アメリカが信する宗教、彼の國が立つ處の政
治を施すにあらずんば能はざるが故に斯く云ふなり、
政治家の國病を治療するは、恰も普通醫の人體を治療す
るが如し、人體軀に病を起すときは、順序ある攝生的道
理にては、其全癒を望むべからず、少くも攝生上よりは
人身に害あるものを興へて以て、其病毒を撲殺す、只其
藥毒として人身を殺すに至らしめざる分量を以て配劑す
るのみ。

良藥口に苦さが如く、良政治家も人民の直覺には餘り受け取れられざるべし、

然し年少政治家の仕事は、國家の良藥にあらずして、寧ろ國民の知覺心を奪ひ取り、若しくは國民の慾望の傾むく處を察して以て、此際に自分の意見を進入せしめ、其目的を達せんと圖るあり、

今の政治家は國家の經濟を壟斷し、國情の秘密を内部より知りて、株式事業をなす、或は鐵道布設を許可する前に當りて、急に地所の買入れに手を回し、山林の拂下を自分の近親の名義にて許し、國家に善政の行はれんことを

を希ふよりも、己のが財産の多からんことをのみ希望し、如何にせば金儲けが出来るかと思ふにあり、故に或る人は之を政治商人と云ふ、此邊の事をなす政治商人は、餘程日本の高等なる處にして、是より以下に人物は、皆是等政治商人の常になす處を探搜し、其瑕疵をのみ需めて、之を世間に發せんとして政治商人を威嚇し、其分配を探ることを勉む、若し己のか意見の達せざるときは、腕力に訴へても其肉片にあり附んと試む、世間如斯ものを名けて壯士と云ふ、

今日政治家の不和を引き起すは、皆利益分配のときにあ

り、此内利益の分配の洩れたる人が、必ず人に先ちて波瀾を起す、此波瀾は金錢さへ與ふれば直に停止するに至る、

今の政治家の戦場は金錢の争ひにあり、金錢のなさに處は、政治家の影なし、金錢のある處へ集まる事は恰も蛆蟲の如し、世の中の政治家は、曰く國憲、曰く自由黨、曰く改進と、其旗色こそ異なれ、其理想に至りては皆前配の蛆蟲黨なり、皆狼黨なり、若し一片にても生肉のありたるときは四方より之に集まり、此肉を争うて血を流し、鬪を削る、只其争ひや君子然たる争ひにして正義を

名とし王室を名とし、國家を名とするの異なるのみ、今の蛆蟲黨の内には學識あるもの至りて少く、大概是新聞雜誌か、講義録によりて一時の目塗り學問をなし、他人に向ひては中々巴里倫敦等の大學に遊びたる素振りをなす、勿論紳士連中の子弟には、洋行して多少の習學する所ありたるには相違なきも、先づ多くのものは、玉突トランプの卒業に過ぎざるべし、シガラの撰み方、ウイスキーの飲み方によりては、外見却々の紳士たるに相違なし、田舎物の過分に尊敬するも無理ならぬ次第なら

東京の名物は博學多識の人物あるも事實なり、然し只今多く世の中を探がし居る人物の大半以上は、皆似せ物にして、一夜造りの政治家なり只少々の金銭によりて歴史を永續したる鍍金物のみ、此の故に政治家となりて世の中少しにても名前の知らるゝには、大概己れの財産を費やしたる後にあらざれば能はざるなり、是れ皆己が名譽の廣告費用に用ひたる證據なり、角田眞平の如き福地源一郎の如き人の政治社會より落されしは、彼等の他より優りて悪事をなしたるにあらず、只運動費の支拂を多くなさざるによりて起れり、今の政治家彼等より尙は多く

の隠れたる悪事をなしたるもの、若しくは爲しつゝあるものを以て充せり。

醜業社會の内側

表面を飾るものは内側賤しく、表面に有の圖を露出するものは、穿る其内側の清さを證するならんか、余れ待合の女將に於て之を見る、彼等は表看板は待合なり、先つ今日普通の慣例によりて判断を下さば、彼等は悪事の集會處なりとす、善事の集會は公開の席にても可なり、豈そ奥深き隠れたる待合室を要せんや、現時何事も待合處斯く繁昌なるは、悪事の却て繁昌なるを證するに足る。

故に余は待合營業者醜業として論せんとす。待合の女は慈善心に富む、彼等は何れも醜業に困苦せし故に、物質的には同情を表して必ず待合の門にては乞食の腹を肥やす、待合はどろつきを待つ事丁寧なり、是も前の同情に出づるなるべし、斯かる金銭の散らし方は、清潔なる思想より出づるや否や疑わし、然し兎にも角にも人に金銭を與ふる習慣性を文り居る故に、得たる金銭を下等人民に與ふる事少も苦にせざるなり、彼等は上流社會の金銭を取りて、下等社會に全情を表す、其志節に至りては高潔なるべし、

彼等は又余か家に入出入するものゝ手當てを施す事至りて親切にして却て商人や官吏の及ぶ處にあらず、斯く彼等は業務に於ては下等なるも、彼等の生活向きに至りては高尚なる處ありて存す、彼等の働きは普通家庭の奥さんに優り、彼等か生活は上等社會の生活に優る、賭博社會の裏面を通觀すれば一種の士族的氣風ありて、只一口の口約は己の身命を賭して誓ひ、一言の恥を興へらるゝは飽丸の發砲を受くるよりも尙ほ恐る、其氣節は男子的氣風の眞想を代表し、其約束は君子の約束の如し、兄弟師弟義堅く、人の不幸を見ては己のか身命を擲ち、

其美風普通社會の得て知るべからざる習慣ありて存す、
 彼等は身は法律の犯罪者なれども、同志仲間之交際に至
 りては實に一種の君子國を形も造り居るを見る、賭博は
 合意の契約によりて金錢の取引をなす速成の事業なり、
 若し此動機によりて惡をなすもの圖らざれば、法律も亦
 之を責めざりしならん、然し無教育のもの一度不時の失
 敗に陥るときは、勢に制せられて惡をなすに至る、因て
 法律も亦之を禁ずるに至りしならん、
 凡て事業は己れを益し又た他を益せざるべからず、然し
 賭博は他を害し又己れも害せらる、故に合意の約束なれ

知己ある人間の爲すべからざるものなり、

騙拐社會に至りても幾分の徳義心あるものと見へて、拘
 り取りたる鞆の中にありたる証書や帳簿は、小荷物郵便
 にて處有主へ返却すると云ふ話あり

悪人と云ふも悪心を持ちたる人のみにあらず、仲には善
 人も加はり居れり善人なりと雖も紳士連中に限らず、其
 心術の善に見ゆるもの返て惡しく、惡に見ゆるもの反て
 善人たる事あり、如何となれば國家の不明なる論評は、
 惡の形跡ありたるものを悪人と断定し、善の形跡あるも
 のを善人と論定すべければなり、若し惡の形跡あるか故

に悪人なりと云はれ、西郷隆盛は永久悪人たるに相違なく善の形蹟あるか故に善人と云はれ、今の内閣諸公は皆善人なりと云はざるべからず、

大隈の足を挫きたるものは誰ぞ、森有禮を殺したるものは誰ぞ世人は皆之を來島西野輩の下手人に罪を歸し、又之を罪す余の見解は之と大に異れり、何か故に彼等は能く之か殺戮事業を執行したるか

彼等は其主義の異るありて殺したるなり、彼二大臣を殺傷したる壯士は、大臣を殺す程なる愛國心のありて然るか、又其反對なる主義を持てるものなるが否決して如斯

き公共公潔の精神なし、只一種の役人として人を殺したるに過ぎず、明治初年の節井伊掃頭を殺したるものは水戸侯にあらずや、而し其下手人は皆水戸の親愛する壯士たるにあらずや、然らば來島輩を親愛し、西野を常に支役したるものは、大隈の足を挫き森有禮を殺したりと想像するもの甚だ不道理ならざるを信するなり、若し此見解の誤るあるも來島西野輩壯士と同主義を持ちたる人は必ず彼の殺戮事業を喜びたるに相違なし、既に人の殺されしを喜ぶ如何に世に現れずと雖も、其不道なる決して罪なしと云ふべし。

余は此の故に總ての事を謂の事實によりて論定せんとす餘り表看板の立派なるものは、其内部は汚れ醜を世に露出するものは、其内部返て高潔なる處あるべしと、

和學者としての人物

隱に曰くじん香も焼かず屁もひらずと、是れ日本和學者を評して穿ち得たりとなす、和學者は日本の歴史の外彼等の腦中になく、其抱負は日本古代の抱負なり、其文學上の趣味に至りても小局部の美術主義を有し、所謂盆栽的美術趣味にして、太平洋の中央より大空に跨がれる銀河を望む如き大觀大量の趣味はあらざるなり、爰を以て

彼等の思想は愈々少なり、少より又細に進み、細より微に進み、遂には指の先にて小俣の玩弄物を製するに適當なる人物を造るに至れり、故に細事なる仕事をなすに至りては、慥かに世界中に向ひて教師の資格を持し居れり、豈ど電氣を虚空より引き下して、人間の需要に應せしむる如き大仕事をなす事を得んや、

和學者は文學上の意見に於ても、亦如斯、彼等の心には天照大神あるの外、至大至尊の宇宙を認めず、此の故に其處論甚だ偏狹にして、世界的主義を持つものなし、恰も鰻牛の壳の中に身を容れ、是れ余が領地なり他のものは

少しも余が領地に進入すべからずと云ふに等し、倘ほ他
 に蝸牛より力量あるもの來りて蝸牛の家と体とを合せて
 他處に運搬するものあるに氣付かざるなり、中には外部
 的刺撃によりて此恐るべきものあるを知るものありと雖
 も、只蝸牛売中の之を豫防するが故に、勞して功なく
 其勞苦は賢者の笑ひを招くに過ぎざるべし、
 彼等に功勞ありとして賞する事は、彼等は慥かに庭園の
 掃除番なり、日本庭園の歴史を詳しく知らんと志すとき
 は、少くも彼等に聞くより外に其教師なかるべし、

庭園の掃除番たるが故に、彼等には只家を風雅にせんと

するの外其思想とては少もなし、從て又惡意も更にな
 し、此迄も柔順なる年寄の庭番なり、家に就きては害
 にもならず、去ればとて今日の化學的社會には効能もな
 さざるなり、

化學的社會は風流的社會とは反し、風流の場所には洋服
 は無用なり、造廠工員に茶の湯の師匠なく、器械師に生
 花を嗜むものあらざるべし、

氣車の布設に従ひて風流は害せられ、外交及び國家經濟
 の多事なるに従ひて坐屈生活は不便なるに至る、風流と
 坐敷生活との不便なるときは、國學者主義の廢せらるゝ

秋なり、茶の湯と生花とを以て露草に敵する事を得んや、公園の歴史如何に美なりと雖も、孱弱なる公卿的意識を以て金貨本位を永續する事を得ん。

和學者は骨董學者なり、骨董物の戰國時代に必要起るにあんらば、彼等は無用の畏物のみ、如何に源氏物語や万葉集古事記の案讀なしたりとも、進歩的意識の潮流に賛抗する事を得んや。

日本の文學は隱者の學なり、世の中を少もかまわず須摩明石の風流に身を隱遁して、社會の事に關係なきものには趣味ある學なり、田子浦に打出でも何心なく富士山を

見て感むるには、此上なき文學なり。別して日本人に取っては快樂趣味を興ふる學なり。

和文學者は只感情に於ける發達をなしたるのみ、和文學の花とも云ふべきものは、古今和歌集を以て之を代表せり、古事記万葉集の文意は古今集の上に總括して表はれたり、古事記は事實によりて之を表はし、万葉集は其筋書を古代に示したるのみ、その他日本人の手に物せられたる幾多の好著述ありと雖も、皆是れ佛教及び儒教の意義を解し易く簡解したるに過ぎざるべし、古今集に至りては純粹なる日本感情文學の花艶なりと云ふも不可なし

と存するなり。

和文學者は意圖の救済を受けざるの片議學者なり、故に人に信切とか柔順とかの片徳ありと雖も、是とて今日の世の中には正直愚人として評するの外彼等の人物を解釋するの語あらざるべし、正直愚人なるが故に陰險なる事は少もなし、只正直の人として、知識のなき人として世の中に特色を顯はすのみ。

知識に過ぐる人は其思想自ら陰險となり、和文學に富める人は其人物只情の發達あるのみにして、寧ろ愚直の人として小膽の人として其入用あるのみ、基より人物を以

て之を待するの人ある道理あらざる也。

國學は多妻主義なり、國學の精神より云へば、多夫を許さずして多妻は少も咎めず、男子は權力ありて婦人は權力なし、故に婦人より紫式部の如き學者の起るも、婦人社會に權力なき處の反動刺戟ならんか、此故に國學は人道に背きたる野戀主義なり、

日本刀の切れ味

日本の刀劍は萬國に其類なき利器なり、露國の人は曰く日本人は日本刀と云ふ利器を持す、此故に其精神陰險なり、此の刀劍とへ買ひ取れば日本の武士風は廢せらるゝ

に至るべしとなし。九州地方に日本人の手を回して刀剣を集めたるを聞く。

斯く萬國に慕はるゝ利器は、只余が日本國に於てのみ製造せらる。

余は刀劍師の行狀を見たり、彼れ名刀を鍛はんと欲するや、二十一日の間夫婦藤を共にせず、身は清淨に沐浴して他念なく、工場には七五三繩を張り、鹽を散布して以て事業を始め、今日の考より之を見るときは、是等の事は實に笑ふに堪へたる事の如し、斯かる精神によりて製造せられたるものにあざれば、其心氣器に於らず、精神

器に移らざれば矢張り鈍刀となりて用に立たざるは、理の見易き處なりとす。

若し總ての職工に於て、皆各自の自重心に此刀鍛冶の常に持するが如き精神を以て其職に就かば、何んぞ其業の衰進せざるあらんや、刀劍師は己の業を神職となせり、故に其神氣は刀劍に打ち廻まるゝに墮る、今日は土木工事に於て親切を欠き、折角製造したるもの、跡より、直ちに破壊する事あり、又兵士の糧食に石及び木の鐵結めを製し苦戦の處に兵士を餓やしたる國賊あるにあらずや、是等のものは刀劍師の前に出で、愧死すべき偽り者なり、

華族の表裏

華族は昔の殿様也、戦國時代腕力を用ひ、他を害し己が領地を請取りたる戦勝者なり、其仲間の或部分の人は明治今日の國家の功勞ありとして遇せられたる人も加はり居れり、又は皇室の一族にして門閥の上より公卿華族として居る處のものありき、然し此の部の華族は極小數にして、同族全能の大部分は、七八部通り皆戦勝者としての華族也、日本人民は皆人間なり、人間は皆平等のものなり、知愚貧富の別ありと雖も、是は只知愚貧富の別に止まりて、人間權利の上には少も關係なし、此平等の人

間に華士族なる上下の階級を置きたるは、抑も如何なる次第なるや、是れ他なし、國家に功勞あるを以ての故なり、皇室に忠節なる事蹟ありたるを以てなり、是れ國家政統の上よりは正當の事にして、余も批難を試みるの理由なし、然し此華族たるもの也、國家に少も功勞もなく皇室に少も忠義を盡さざるものに矢張り華族の名號を興へ、之に年金を附し世襲財産を興ふ、斯の點に至りては余其不道理なる事を思ふが故に、之を爰の處に論せんと欲するものなり、

前に云へる如く人間は皆平等なり、此平等なる人間の或

る者のみに華族の資格を興ふるは、其人に効勞ありたるによりて然る也。然し其人に効勞ありたればとて、其子孫に至る迄永時永續して國家に効勞あり、又皇室の忠節家なりとは斷すべからず、効勞あるものは効勞ありたる其人にのみ興ふるものにして、効勞ありたる家に興ふるものにあらず、是れ狄中火を見るより明なる事實なり、然るに今の華族制は一人効勞あるものあらは其人に華族を興へ、夫れよりは永時永久其子孫は馬鹿であらうが、悪人であらうが、賣國奴にてあらうが、賭博者にてあらうが、其榮族の中に酣醉する次第也、困苦は人を人物と

なし、安樂は人を馬鹿に變化す、華族は先祖が華族なるが故に世襲の財産を受く、此の故に人間の勉をなすの志節なく、病氣さへなくは此上もなき目的にて、其他には懸念なし、此故に華族の子弟は次第に愚となり、次第に馬鹿となり、放逸となり賭博でもせざれば身の變みも無き程の無用物となる、華族は國家の功臣なり、皇室の忠節家なり、然し之を功臣忠貞なる其人に興へずして其家に興ふるに至りては切角の勳章も賞與も其効勞を賞するど云ふ精神に反したる事實となりて國家に孱弱なるものを來し、健全なる人種を腐敗せしめ、國家の毒蟲を繁殖

し、人間の平等權を害し、社會の不平均を來し、國家は之によりて滅亡の過機を發するに至るべし、

日本に華族多しと雖も、七八人の人を除くの外は、皆今の國家を益するもの少く、大概は國の風俗を害するもののみなり、政府は今に於て之を改革するにあらずんば、革命を製造するに等し、其節に至り悔ゆるよりも、今日に於て不道理を改むるに加く事あらんや、余は之を切に政府へ忠告するものなり、

禍の起るは起るの日に起るにあらず、蓋し必ず因て起る源あり、其源なる萌芽の中に豫防するにあらずんば、善

政の開者と云ふべからず、如何に其政を改むべきと云ふ所の

發して之を靜づめんとせば國家の經濟を亂るべし、今日は余か同胞の内に社會主義をさへ唱ふる學者起るにあらずや、社會主義の勢力を得る時代は、クローンウエルの時代なり、日本クローンウエルの生長時代は革命を起すの時代ならずや、革命の起るときは、今の風俗の破壊せらるゝ秋にあらずや、

十七八世紀は、歐州政命の時代にして、廿世紀は東洋革命の時代なり、現時は此時代の春を迎へ居にあらずや、日ならずして、日露英は支那國の舞臺に戦争し、大紛亂

し、人間の平等權を害し、社會の不平均を來し、國家は之によりて滅亡の過機を發するに至るべし。

日本に華族多しと雖も、七八人の人を除くの外は、皆今の國家を益するもの少く、大概は國の風俗を害するもののみなり、政府は今に於て之を改革するにあらずんば、革命を製造するに等し。其節に至り悔ゆるよりも、今日に於て不道理を改むるに加く事あらんや、余は之を切に政府へ忠告するものなり。

禍の起るは起るの日に起るにあらず、蓋し必ず因て起る源あり、其源なる萌芽の中に豫防するにあらずんば、善

政の職者と云ふべからず、如何に軍隊ありと雖も、禍の發して之を靜づめんとせば國家の經濟を亂るべし、今日は余か同胞の内に社會主義をさへ唱ふる學者起るにあらずや、社會主義の勢力を得る時代は、クロンウエルの時代なり、日本クロンウエルの生長時代は革命を起すの時代ならずや、革命の起るときは、今の風俗の破壊せらるゝ秋にあらずや。

十七八世紀は、歐洲政命の時代にして、廿世紀は東洋革命の時代なり、現時は此時代の春を迎へ居にあらずや、

日ならずして、日露英は支那國の舞臺に戦争し、大紛亂

を來すの隙、若し一々の東洋に社會主義を持てる人傑の
起るありて此禍亂を利用するもの出づるあらば、富士矢
鳴は國防の軍艦たらずして改命軍の運送船たるべし。

外よりは手もあてられぬ要害に

内よりわるゝ粟のいかな

此歌は徳川氏の全盛時代に、徳川の滅亡を規して咏した
る詩にあらずや、般艦遠からずと云ふ誓言の實行せらる
も二十一世紀の内へは入らざるべし。

無名の密使を海外に出す

政府は海外に速かに無名の密使を派遣すべし、軍事上よ

り派遣するのみならず、實業的政治家の派遣をなすべし。
日清戦争の節日本に於て大勝を奏したるは密使の報告に
より功を奏したるにあらずや、英國の國旗を翻したる
運送船に大膽にも發砲を决行して、精英なる清軍の仁川
に上陸するを防きたるは、暗號電報の助けによりて船中
に敵軍の滿載してありしと知りたるにあらずや、實事に
於て如斯秘使に大功を奏さば、政治上に於ても亦同比例
の効なしとなさんや、政府は布陸國に日本の端書を以て
通信をなさしむ、是れ同胞出稼き人の便利を圖るに出つ
ると雖も、素より之れを決行するは、布陸は日本國の一

部分たるか如き思想上より之を早く決行したるにあらずや、然るに今は米國の國旗は余か政治先權を害して、日本人は表面の目的なる出稼ぎ人たるに過ぎず、布哇人及他人の奴隸たるに過ぎず、何によりて斯くも失敗を取りたるか、之れ他なし、日本より始めに當りて實業的政治的人物の密行者を派遣せざるにあり、日本人は只奴隸として布哇國にありたるによるのみ、奴隸如何に多人數なりと雖も、之を便役する處の主人公のあらずんば、只害をなすの効ありて其効能を奏せざるべし、米人に宜しくせらるゝの秋に至りて、軍艦の派遣を命ず、既に遅うし、

只入費を損するのみ、

布哇の失策は、只失策として置かずして他に對するの試験となし、是よりは此試験に及第し、早く上海に南京に南洋に暹羅に、其他後來目的の要路に向ひて少くも百人宛の密使を派遣すべし、吾人の唱ふる密使は彼の土地に深く入りて彼の國の人民となり、彼の國の土地に深く複雑なる關係を需めしめ、國情を内部より見る處の實業的政治家の派遣を奨勵せよと、忠告するのみ、他日事業をなすの節、早く今日に着手するにあらずんば、其時に至り臍を噛むとも及ばざるべし、

今の政治家は國家經費の足らざるを云ふ、然し實業的密使は少額の資本金と旅行入費さへ與ふれば夫れに足れりとなす、少も多額の國費を用ゆるの要あらんや、政府若し此事業を惰るならば、余は日本の大政黨は先ちて此事業を取り、政府の顧問役として國家に謀さんことを望む政黨は只此小なき國內に於て、議員たる事をのみ目的とする。

日本人物としての觀測

戰爭的人物としては日本人は全世界に向ひて誇り得べき人物なりとす。知識的人物としても世界に向ひて其競争

に堪へ得る事を信す、然し日本人の大欠點は、忍耐力の點に於て胸宇の大量なる點に於て他國人に及ぶべからず。若し一事實の起るときは、東洋の人は泣いて以て之をなす、其泣くや己れの不幸の地に入りしを以て泣くなり、又或る事件の起るに當りては直ちに怒りて以て之に向ふ。其怒るや他の不道理なるを主にして怒らずして、只己れを馬鹿にしたりとして怒るなり、此の故に其怒るや發狂人の如く、狂ひ廻りて怒るなり、西洋の人は全く之と異り、一事實の起るときは之を先づ慎重に考ふ、其事實の眞想原因を察す、爰に於てか泣くべきは泣き、怒

るべきは怒る、東洋の人は速断を以て直ちに決す、西洋の人は沈思して之を決す、東洋の人には其見解の過失に陥る事多く、西洋の人には過失に陥る事少し、東洋の人は氣早なり、少くも日本人は尙ほ氣早なり、此の故に其過失も隨て駿足にして、其結果を付けるも亦早し、西洋の人は氣持鷹揚なり、此の故に怒る事も遅く泣く事も遅く笑ふ事も従ひて遅し、爰に於てか過失も遅く、事の落着を決する事も遅し、東洋の人は直ちに泣いて又直ちに笑ふ、然し西洋人の一度泣くときは眞の涙を流して泣けり、其怒るや一旦怒るときは眞に身の毛をふるはして怒

れり、此の故に其怒りに觸るゝや如何なる親密のものとも雖も、直に交際を絶するの不始末なり、東洋の人の怒るは小兒の怒る如く、其泣くや小兒の泣くに等し、朝泣いて暮に笑ひ、夜半に怒りて、夜明れば消ゆ、恰も小兒の群に等し。

日本人物の大欠點は知識を以て過失を見別し、道徳を以て己れの過失を容るすにあり、西洋の人は知識を以て己の過失を見出して之を改め、道徳を以て人の過失を成るべく許すを以て人物となす。

日本の人物は人の悪事を細大となく探索し、己れの過失

は成るべく之を隠して人に知らしめざるを勤む。故に日本の人物は人は部下の者に信用なし。此の故に之を統御するや法律を以て之を命令す。細かき事に至る迄法律を以て之を命せざれば行はれず。西洋の人物は以前の如くなるが故に部下に信用せらる。此の故に其命令の行はるゝ事、草の風に従ふが如し。加之ならず之を當むるや多くは法律を以てせずして適宜の意見を以て之をなす。日本の人は人の罪を免るすの度量なし。西洋の人は之に反し。人の罪を容るす。これ日本人に優る所。日本の人物も人の罪を容るす。然し余れ汝の無禮を容るすど口に

云うて長く之を忘れず。西洋の紳士は人の無禮を容るすや。只之を口に容るすのみならず。既に許したりと云へば心の内迄も之を許るす。是れ日本人物の西洋人物に異りたる處なりとす。

日本の人物は好人物と人に云はるゝ程、陰險なる知識も多く貯ふ。西洋の人物は好人物と人に云はる程邪念は滅し去る。只純粹の知識と純粹の徳義とを存し貯ふるのみ。故に今日の知識世界に於ては、此高度なる知識を能く運轉支配する程なる西洋道徳を學ぶにあらずんば、今日の君子として將た好人物としては立つ事を得ざるべ

し。
東洋道德書に於ては「己れの欲せざる事を人に施す事勿れと云ふ、然し西洋道德にては「己のが人にせられんと欲する事は人に先つ先き立ちて之を施せ」と言ふ、此の全條を一讀するときは雙方同じ意味の様に考ふれども、深く其深意の存する處を察すれば、東洋道德にては人の欲せざる事を行ふ事勿れと禁示し、西洋徳道に於ては巴の人にせられんと欲する如き事は人に先んじて己れより之を施せと謂ふ意味なり。

又他の條に君子は道を行はざるを痛むと云ふのみ、西洋道德に於ては「己れ道を知りたりと云ひて直ちに之を實行に移さざるものは、其道を知らざるものより劣りて彼れは寧ろ偽善者なり」と、其教ゆる事皆駿逸なり、前に演ぶるが如く知識の高度なるが如く、彼れ等の讀む處の論理書は高等なり、然るに日本現在の有様は彼れの高度なる知識のみを探り來りて、之を相平均し居る處の高度の道德書を讀まず只邪教なりと云て之を退ぞく、是れ日本人の狭量なる證據なりとす、余れ彼れの書を讀む、善ならば之を探りて之を余が身の利益となす、若し惡ならば只之を退くのみ、何ぞ之を見ず之を讀まず之を味はず

して只邪教なるを以て譏る事のみなすの要あらんや。

彼の書若し其書ならば、何程譏るも其書なり、彼書若し不道理ならば之を讀むも亦不道理なり、今日は其其否を鑑別して早々世界の舞臺に躍り得へきの資格を造らん事を速ならしむるにあり、

日本人は總ての事を分析する處の知識を有す、少くも世界的人物となり得る事の出來し大學生徒なり、彼れ若し眞理なくは之を研究して世界より退かしむへく、彼れ若し優りたる眞理あらば採りて以て余か世界的人物卒業の材料となすべし。豈何る今の戰國時代に當り肉食場裏

に爾爾夢死して輕困なる人道を承續するを庸ひんや。

支那の人物

支那の人物は字を多く讀むものを以て人物となす。古代の支那國にありては、儒教を貴ひ王道を以て國體となす次第に國の變遷するに當りて、王陽明の如き實學者起り、言行一致の説をなすに至る迄、兎角に發達せり、然し愛親覺羅の一度滿州より起るや、古代の氣骨ある書籍を廢し、萬民を愚にして只利益の一點に向ひて生活する國民を養生せり、故に今に至りては國家の元氣を失ひ、只人間は生活と云へすれば人間なりと云ふ思想を抱持し居る

に至れり、恰も歐羅の原野に生活するに等し。愛を以て金銭さへ得らるれば如何なる困苦も辭せず、如何なる耻をも忍び得るなり。如斯國情なるが故に、國家的觀念を持たて政治の運動するものなく、社會の發達を圖りて改新的事業を始むるものもなし、此内の人物と云はるゝ人は、只金銭を多く得る人なり、只金銭さへ得れば賭博によるも盜賊によるも、其集むる方法の如何は拵て問はざるなし、

故に官吏は官吏中の人物たらんとして地位の許るす限り賂を採り、總辨は國を賣りて他國の使節より多額の配當

を受く、此内にある學者は又字を讀まば夫れにて足れり、少しにて氣焰を吐くときは、直ちに國賊なりと拘禁せらるゝに至る、故に學者としての人物は只字引を一冊傍に置けば夫れにて足り、官吏としての人物は賂を貪り、人民としては盜賊をなし、宗教家と云へば寄附金を多く集めさへすれば、夫れにて支那國內にて大人物として人に尊敬せらるゝと云ふ、

抑も如斯國情を造りたるものは今帝王の先祖なり、彼れ等滿州より始めて北京に入るや、知識に於ては南清人に劣るが故に嚴禁して知者義者を馬鹿にし、義人の古書

讀むものは國の官吏として登庸せざるを以て誓へり、爰を以て今の馬鹿人民を漸くにして製造し、其事業の結果を奏するや否や、外交事情は複雑となりたるが、外國人へも此教養は及はざる故に、外人は皆知者なり、故に戦へば必ず敗れ論すれば、必ず敗し國は次第に縮められ償金は毎年取られ、今日となりては如何とも國政の施し方を見出さるに至れり。

歐洲の人物

歐洲の人物は極めて着念なる人物なり、善にも惡にも着悉深き人物なり、故に歐洲人に信用せらるるや二回や三四

回の惡事をなしたりとて尙其信用を解かず、一旦彼の婦人に見戀せらるゝや身命を賭して之を慕ひ、古郷を離れて遠き東洋迄も戀人の跡を追蹟するあり、又惡人に至りては日本の惡人の如く小惡人にあらずして極めて峻酷なる大惡人なり、山陽鐵道にて氣車中に人を殺したるものを聴く、然し是れ只一人を殺したるのみ、西洋にありては一列車の通行を禁じ、乗客の財産を残らず奪ひ取るものありと聴く、東京市中には下駄や蝙蝠傘の盜賊あり、然し西洋に於ては銀行の金庫を奪ひ取るものありと聴く、日本に於ては出刃庖丁を持ちて人を殺したるもの多

し。然し西洋に於てはモルヒネ及び古那を以て人を殺し
其悪人の誰なるかを發見せしめざる事多し。
義に至りても如斯。東洋の義人の如く讀書的の義人にあ
らずして、曾生命を道の爲めに捧げ居れり全く献身的の
義人多し。中には偽善者あると雖も是は義人の仲間にあ
らず、正義を唱へて一日の間に十万人も殺されし佛國の
義人あるにあらずや、此國王は三日間義人を殺し、四日目
に至り余れ深く悔ひ改むと云ひて、己れも正義に従ひし
にあらずや、是等の殺されし人は少も國王に手向ひした
るものなし。獨逸に於て英國に於て古代はローマに於て

曾世人は歴史の示す處によりて義人の働きを見たるにあ
らずや、余は他日歴史を發表すべけれども、爰には概論
中の酷なる部分を略記するのみ、近くは米國に於て支那
人禁制の節、米國の或る義人大に之を歎じ、存廳の前に
立ち晝夜の演説をなし、四海兄弟の大義を説いて米國法
律の不道理なるを説破し、憲兵ピストルを向けて以て之
を制するにも關はらず、七晝夜の演説を爲し、此演説の
爲めに腦は破裂して死したるものあるにあらずや。此義
人死するや否や、米國は支那人制限論に變じて、禁止論
を廢止したるに非ずや、如斯已れ一旦義正なりと信する

事は、此主義の貫徹せられん爲には實に死を以て之を防ぐ。又獨逸の田舎に於て小兒の大道に遊べるとき、圖らずも獅子の出つるありて小兒を害せんとす。此時此小兒を救はんが爲め、此獅子に飛び付きて此愛兒を救ひたる母親ある等。皆其精神の純正確實なる、遠く東洋人の及ぶ處にあらず。

東洋の人は釋迦及び孔子を學ぶ、故に釋迦及び孔子に近き人物となる。歐洲の人はマホメット及びクリストを宗とす、故に此マホメット及びクリストに近き性質の人物となる。東西風俗性質の異なる事實宗教に根柢を發せざる

ものなし。

日本れ人物

中古以前の人物は、嘗な尊武の性格に似たる人物の多く起り居るを見る、昔の人物觀測は之にて筆を止め、今日の人物の性格を論例すべし、日本人の知實は變造的知識を以し、創設知識を有せず、中古以前にありては未だ儒佛の思想汎く全國に布及せざるときにありては、嘗特定の日本主義を持するもの、みなりしも、儒佛の傳來してより以來は、能く此儒佛敎を味ひ、之を自分の國情に合せ、遂に之を變造して日本の儒佛と云ふものを今日に残すに

至れり、日清戦争に於ては西洋の化學器械學を用ひ、之を日本に應用して歐州人の指揮官となり居る支那軍を戮殺したるにあらずや、露西亞の從軍士官日本軍の兵糧を見て曰く今回の戦争は日本人の結構敗に歸すと、如何となれば日本人は万里の遠征に米の糧食を用ゆと評笑せり。然し日本軍の用ひたる米は、西洋人の用ゆる米と異り、道明寺の構なり、日本兵士は之をハンカチーフに包み、鉄瓶に湯を沸かして、其中へ容れ、之を食したりと云ふ。故に一斗の道明寺は三斗の米の代用をなす、或る時は此糲を食しながら行軍して、生命を永續したるにあらずや。

西洋人の用ゆる氣車道は廣し、然し日本現今のレールは狭し、是れ日本人の發見應用を始めて試みたる次第ならんか、其他電氣と云ひ、蒸氣力と云ひ、教育と云ひ、軍隊訓練と云ひ、皆原理を應用して日本のものとなしたるにあらずや、實に其知慧は巧者也、早番込を決行する人種なり、然し宗教に至りては、只教理を應用したるに止まり其の根底より探り用ゆるものは神道の一あるのみ、其他の宗教にて佛教の如き稍其主味を解するものありと雖も、其他の宗教に至りては只其形影を移したるのみ、余を以て思ふ存分に云はしむれば、日本には一も宗教な

るものは行はれず。又宗教の真意義をも行ふものはなし。只宗教を文學として學び、其形影を應用して大禮の節具似をするのみ、恰も支那に於て泣人を雇ひ入れ、葬式の節人をして泣がしむる如し。中には愚人の深く信するものありと雖も、妄想的信仰を有して活動せる宗教の生命を社會に應用するものに至りては、教導の職にあるものと雖も未だしなり。

爰に日本人の特色とも云ふべき氣風は、全國民團結して外敵を防ぐと云ふ事なり、余が同胞内には如何に利慾心あるものと雖も、外國の如く賣國奴は一人もなしと信ず。

是れ日本が他國に異りたる美風なりとす。

日本美術家の特色

左甚五郎と云ふ彫刻家四國伊豫松山の北一里を去る道徳の人なりと云ふ、彼れ一日鯉を彫刻し之を水の中に容る。然る處此鯉は泳ぎて淵の中に入りしと云ふ、彼れ猫を刻み之を坐敷の内に置く、然る處此坐敷の内へは鼠の來る事なしと、

余れ其果して然るや否やを知らず、然し日本美術の世界に向ひて誇るに足る處のものは、日本の名作には氣韻生命のあるありて恰も眞物を見るに異る事なし。

文晁の畫に至りては、雲の内より雨沛然として今にも零らんとする如く、斷巖絶壁の處慄然として毛髮の立つるを覺ゆ、余れ美術に詳しからず、然し凡て畫に望みて此精神の起るあるは美術の神韻を打ち出したるものに相違なし、况んや美術心なきものゝ心を發動せしむるの勢力あるに於ておや、花鳥畫に至りては尙ほ美麗を感ずる事多し、畫の要は描かんとするものゝ生命を己れの腦に移し、處感遺る方なく之を筆に移す。爰に於てか此畫に生命を生ず、日本は天然の風景に富み、草花鳥獸は至る處の目前に存在す、爰を以て日本美術家は美術的生命の

中に、漬物の鹽に浸さるゝか如く、浸し置かるゝが故に彼等の腦髓は美術生命の實体なりと云ふも不可なきなり、俗人と雖も此の内において紅葉及び雪花櫻花の遊覽に餘曠なく出遊せるにあらずや、天地の美術は此俗人を俗塵の内より引き出しして、美術の神園に向はしむるの勢力あり、况んや日本専門の美術家の精神の發達せしむるに於てをや、

實に日本國か美術の標本也、日本國民も美術の標本也、吾等か語る事も美術の發言なり、日本人は美の中に生れ美の生命を呑み、亦此美術の大觀中へ歸り、美術の土に

化する樂園にあらずや、日本人は日本國を離れては樂みなく、日本の土に化せざれば救はれざるなり、日本は美術宗教と云ふ生命がありて人生を美術の大觀中美妙なる天の使たらしむると云ふも過言にあらざるなり、

日本人の美術心は他人の梅の枝を盗み折るによりて知らるゝなり、随分紳士と雖も此美術心に驅られては他人の梅ヶ枝を折る、彼等は盜心ありて折るにあらず、只折り度くて困る故に折る也、例へば俳道に於て盜むの文字を忌む然れども若し花盗人と言へば咎めざるが如し、實に其思想盜みから美なりと云はざるべからず、此心に限り

ては他國人の決して味ふ事を得ざる處なり、

日本人は花を盗む、西洋人は實を盗む、既に盜む處は同じと雖も其精神に至りては余は日本人に學はんことを欲す、此資格は慥かに日本人に存す、是れ日本人は美的人種たるに相違なき所以也、

教育家の表衷

教育家は子弟の天與の本性を教育發達せしめて圓満なる人物となす處の教導天職なり、技術家として立つにあらずして、教師と云ふ天職の資性を何れの處にあるも備へざるべからず、技師と云ふものは一目に何時間と云ふ時

間の切り賣りをなし、其時間中執務して其報酬を得るものと謂のみ、鐵道技師に於ける船舶の器機師の如し、今の教員は前の精神を持てる人なし、己れは日本の惜かに教育家なりと云ふ氣節を持するもの少し、此の故に彼等は執務の時間中は先生として、散校の後は教員にあらず、只一日五時中の先生たるのみ、余は故に今の教員を技師と云ふ、教員にして前の如き時間賣りをなすものならば、下等社會の職工と毫も異なる事なし、職工は時間の中は仕事をなし、其時間經過すれば如何に必要な事起るも決して關する處にあらず、今の教師の風儀も亦如斯、

既に時間を賣りて生活する教師は、教師の眞似をする職工なり、既に眞似をするもの故其感化の生徒に及べる道理なし、感化の及ばざる證據は、生徒の教師を尊敬せざるにあり、今の生徒は教師を見る只職工を以て遇し、子弟の間柄恰も主人の職工に對するが如し、生徒は主人にして、教師は職工たり、是れ、普通學校に行はるゝ風儀なり、
教師にして教師たるべき精神と態度あらば、何ぞ生徒の心に教師を職工視するの感念あらむや、
教師の精神は高潔篤實にして、其精神の生徒に及ばすは

慈母の小兒に及べる如く、春雨の艸の芽に及べる如くならざるべからず。若し斯かゝる教師あらば生徒をして尊敬せしめざらんと欲するも得べからざるなり、都會の教師は一日に十五時間の執務をなすものあり、自轉車に乗りて他校より他校に移る。或る人は如斯に關らず、或る教師は五時間の放校後は家に歸りて内職をなす、其内職も種々ありて借家の周旋をなすものあり、高利貸を營むものあり、煎餅を焼くものあり、亦是賭博を密々になすものもあるなり、既に學習院の教員の内、放校後高利を催促に廻る不徳教師あるにあらざるや。

紳商と云ふ人物の裏面

今の紳商は投機師なり、政府の保護金と社會の積立金を利用して株式に勝利を得たる人を以て紳士となす、是等の人は國家經濟の意向を知るが故に、大概は損失をなす事なし、若しも万一に失敗する事あらば、彼等は生命を失ひて之を謝せん決心なり、日本鐵道社會にて重役に自殺の起り、電燈會社にて自殺者の起りたる皆人の金を利用して株式に失敗をなしたる不幸の人なり、日本の紳商は官吏と結托して政府事業の受負をなす、此事業は利益を折半して營む、共托事業なれば損をする事

なし、儲かに儲ると定まりたる仕事なり。

今の紳商は經濟の上より、國家の利益を集むる一種の實業的政治家なり、戰爭の起るときは運送業をなし、國家饑饉なるときは南京米を買ひ入れて高價に賣捌く商賣人なり、今の紳商の内箇々として學業を採るもの、外、會社の若しくは銀行の重役たるものは、皆他人の金錢を流通する盜賊生活に甘せんと志すのみ、

彼等が住所は美麗なり、然し其座敷は只花骨牌の集會所に過ぎず、彼等が交際費は多額なり、然し此内の過半は妾宅營繕費に失費せらる、彼等は社會の爲めに買ひ入る

ものは高價にして、己のが爲めに會社より不用品として買取るものは安し、今日の株主は重役の妾宅營繕費を支拂ふ爲めに資金を與ふるに等し、年末に至り其配當の少きは以て故なしとせず、今日の株主は資本の用ひ方を知らざる處の華族を以て多しとなす故に會社の表面は帳簿さへ整理しあれば、其裏面には不都合の事あるを見出すの方法なし、故に是等の人物を余は白晝經濟的盜賊と名づく。

宗教家の裏面

宗教家は俗より脱けたる聖人なり、俗社會を感化せんと

する教導職なり。今の宗教家は只名のみ宗教家なり。聖者は一人もなし。日本現在になし。寧ろ俗社會を化する事を得んや。

大坂の宗教家東京に至れば東京化する、東京の宗教家京都に至れば亦京都化する。今日の感化力は宗教家の俗を化す能力よりも、俗社會の俗化力反て勝りたるを見るなり。余は株式取引所の立合を見る。彼等仲買人の熱心なる態くに堪へたり。彼等を中止すると雖も、彼等には其聲耳に入らざる程なり。中止策は小使をして散水を座場の集會人に撒布せり。於てか彼等は其立合を中止せり。

余は僧侶教師の説教を聴く。然し他人を活さんとする説教の能力は社會を俗化せんとする。藝者の感化力に及ばざりき。何ぞ株式仲買人の熱心あらんや。余は断じて確言す。説教の勢能く株式買買力の勢力に勝ち、訓誨の靈力強くして新橋藝者の遊治郎を腦殺する魔力に勝つにあらずんば、今の宗教家は藝者社會に劣りたる状態なりと確言せんとす。余は寧ろ今日の講談落語壯士芝居の類こそ、反て俗社會の人を感化しつつあるの蹟あるを見る。余れ一日劇場に至る、看客の内泣かざるもの少し、余れも又大に感ずる處ありたり。余は歸宅後感ずらく、今日の宗教家

の感化力は、壯士芝居話し家の感化力に及ばず、日本に於て宗教家が私生兒を生ましむる事、日に月に其數を増すの時代にありては、國家の風俗は尙ほ墮落に向ひて其歩を早やむる証蹟として確言するなり、

今の宗教家は重きを教養の上に置かずして、只表面の儀式に於てのみ爭論をなす、是より一步を進みたる宗教家にして、漸く宗旨を名として議論をなすのみ、

佛教は如何、其教養の興義とする處は自覺的に佛心を求むるにあり、若し衆庶にして自覺心なきものへは、種々なる方法を施し、人生の直覺性を指摘して智之を悟道心に導かんぞす、茲に於てか地獄極樂の説法も擔ひ出す次第ならめ、

地獄を説き極樂淨土を教ゆる之れ智人を悟道に導かん爲めなり、然るに禪宗にありては此教義を賤しめ、又他門派にありては反て禪宗は人を教ふるの順序を知らざるものとて笑ふ、又淨土宗は南無阿彌陀佛の字句に重きを置き、教義を妻帯に翻譯して日本人の氣に入る様に製造して、其勢力の及ぶ處他人の知り得べからざる程に跨かまれり、淨土宗の信者にも禪學を志すものあり、禪宗の内にも随分地獄的樂極宗の迷信家の多くあるは、現時佛教界の

勢態にあらざるや、信徒は既に如斯なるに、此教の布教者は
 只外典の事にのみ重きを置き、佛者の教義よりも製造の
 宗派に重きを置き、同教同志の暗打ちをなし居るにあ
 らざるや、事茲に至りては佛者の精神にあらざるのみなら
 ず、普通の信徒に劣りたるものと云ふべきものなり、
 クリスト教に於ても如斯、舊派の曰くルーテルは姦淫を
 なして破門されたるものなり、舊教の人はルーテルの如
 き不義者は同宗に齒する事を許さず、放逐したる罪人な
 りと、然れどもルーテルは一度獨逸に起りて宗教の改革
 を唱へてより以來、彼れの熱心なる説教により改悔した

る人舊教よりも反て多くあるにあらざるや、新教の人曰く
 舊教は人の自由性を害す、只儀式のみを重んじて信仰に
 よらずと、然し舊教の内よりも有名なる慈善家として仁
 者義者を起したるにあらざるや、今の宗教界は仲間喧嘩の
 時代なり、彼れは信仰なしと云ふは始めて云ふたる人に
 信仰なき驗なり、彼等は馬鹿なりと云はば云ふたる人の
 馬鹿を代表する廣告に等し、エコテリヤンの内より熱心
 なる信仰家の出づるにあらざるや、オルズドックス派の内
 よりも乾燥無味なる理屈を唱ふる哲學者の起るにあらざ
 るや、

今の宗教界は波瀾時代なり、教師よりも信徒に人物多
き時代なり、僧侶よりも普通人に佛心を永續するの時代
なり、

嗚呼爰に至つてか宗教界の事又言ふに忍びざるなり、

人物の裏面終

明治卅二年十二月十五日印刷

全 卅三年二月廿日發行

定價金二十錢

著者 大月 隆
東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 大月 隆
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 千葉 四郎三郎
東京市麹町區飯田町五丁目壹番地

印刷所 文學同志會印刷所
東京市麹町區飯田町五丁目壹番地



發兌元

東京市神田區錦町一丁目十番地

文學同志會

●文學同志會出版書籍目錄●

大 賣 捌
 大坂備後町四丁目 盛文館
 東京神田區雉子町 山本錄藏
 東京々弓橋町 松村三松堂

美 妙

定價 二十錢
 郵稅 四錢

春は花夏は螢秋の虫の聲冬の雪是等を始めとして人生の美貌鳥獸の
 艶ある事及び音楽より來る美如何に人生に快樂を興ふる賜なるか本
 書を繙くときは幽谷の鱈魚又飛立の妙美あり

文 學 の 調 和

定價 二十五錢
 郵稅 四錢

國異れば各々異りたる所の事情あり異なる事情より各々殊別の文學を

生む是れ一般の通理なりまし深く深究し來れば皆一に歸するものなり
 本書は各國文學の異なる處を示し長知の意見を示し如何にして其調
 和均一の點に達すへきかを詳論せり

人生の目的

定價 二十五錢
 郵稅 四錢

- 第一章緒論 ●第二章飲食主義 ●第三章勤勞主義 ●第四章競爭主義
- 第五章知識主義 ●第六章良心主義 ●第七章忠孝主義 ●第八章幸福
- 第九章自愛主義 ●第十章他愛主義 ●第十一章兼愛主義 ●第十二章
- 第十三章保存主義 ●第十四章競爭主義 ●第十五章忠孝主義 ●第十六章
- 第十七章知識主義 ●第十八章自愛主義 ●第十九章他愛主義 ●第二十
- 第二十一章兼愛主義 ●第二十二章保存主義 ●第二十三章結論

人生の老旅

定價 二十錢
 郵稅 四錢

世に不幸の人多しと雖も己のが涙の洩し場なき人はと苦痛の人はあ

らざるべし人生の老旅は是等の人の情友となり人なき處に於て深く
 兄弟に同情を表し其煩悶を慰むへし
 本書は人生の初旅の後篇なり初旅を讀む人は必ず後篇を讀まざるべ
 からず

婦人實務錄

定價 十六錢
 郵稅 二錢

此書は議論にあらず婦人の實際毎日に心得ざるを得ざる教訓心得方
 針を信切に説き苟も婦人として心得ざるを得ざる案内書也

人生の初旅

定價 二十錢
 郵稅 四錢

人の一生中には如何なる事が起るか如何に歩まざる可からざるか如
 何にせば立身すべきか如何なる人が失敗せしか本書は未開快絶の實
 行録なり詩文あり散文あり小説あり議論あり先づ一生涯の記録と思
 ふて可なり

家の寶全

定價 三十錢
 郵稅 六錢

本書は文學會の方針とする家制部發表の書にして各専門大家の家制
意見及び家に起る萬般の事業方法を教へ其項目にても五百有餘あり
廿八年初版を起し今廿三版を重ね部數二十七万部を發賣せる書なり
手に取りて其價額を知れ始は二冊なりしが今は合本なり

馬琴妙文集

詩文散文序文末文碑文箴文戯曲座右銘等馬琴全著述中の粹を集めたるもなり

定價 四十錢

立身事蹟

世には失策を以て充たせり失策せぬ先に失策に陥らざる方法を講ず
るは立身の急務なるべく古今の聖賢と座右に立談し彼等が失策と成
効の事蹟を尋ね本書を友とするもの立身せざんと欲するも豈得べけんや

定價 四十錢

山高水長

定價 四十錢

語らんと欲する事を語らずして人に知らしめ言はんと欲する事を口
に明かに言はずして其言聲の美を知らしむ是れ新体詩の特色なりと
す坐ながら天地の怪美を味はんと欲するものは山高水長の傍に來れ

斷巖絕壁

定價 三十錢

文天祥正氣の歌を始めとして和漢の文粹を集めたるものにして今回
本會に於て出版せり盛夏綠蔭の下本書を繙かば心神自ら清涼に浴す
るの感あらん

人生の氣力

定價 廿五錢

船舶波を犯して走るは蒸力の勢力あるを以てなり社會の迫害を排し
て能く身の全安を圖らんとせば須らく吞海の氣力は養はざるへから
ず本書は即ち吾人の蒸氣力也

吾人之生活

定價 卅五錢

本書は文明の生活なり内地雜居後の生活なり日本人としては文明前
 社交を知らん。欲せは本書の他に其友なし

風月萬象

定價 三十五錢
 郵稅 六錢

松風吟月

定價 三十錢
 郵稅 六錢

人生の片影

定價 二十錢
 郵稅 二錢

鴨長明海道記

定價 十五錢

廻國雜記

定價 二十錢

人生の悔悟

定價 二十錢
 郵稅 四錢

●父母に別れし悔悟 ●婚入りをせし悔悟 ●學問を學びし悔悟 ●物を
 輕信せし悔悟 ●都會の飲食物 ●人を信用せし悔悟 ●正直の悔悟 ●交
 際を擴めし悔悟 ●望の悔悟 ●一期の失望 ●二期の失望 ●三期の失望 ●時
 ●四期の失望 ●都會にありし人の悔悟 ●富家に生れし人の悔悟 ●身
 間を徒費せし悔悟 ●物に溺れし悔悟 ●喫煙を始めし悔悟 ●身を虚弱
 にせし悔悟

禪學斷片

定價 二十錢
 郵稅 四錢

艷麗文粹

定價 二十錢
 郵稅 四錢

万情万眉

定價 二十五錢
 郵稅 四錢

全盛福小福盛全
岡島諸原井岡本和葉口澤岡北

木鶴鈴廣中廣鈴鶴木
文鳴萬文正井文萬助閣店
學海新吉堂助閣店
水琴華華華華華華華華
文華華華華華華華華華
立真真真真真真真真
桂梅真真真真真真真真
宇宮源
目都
博文十堂

一ノ關
青森
須賀川
長野
羽後
德島
甲府
諏訪
熊谷
高田
富山
和歌山

文港政憲
鎌田
寶來
西澤喜太郎
大澤堅次郎
黑崎書店
柳生堂
日進堂
伊藤書店
高橋書店
小林清眞堂
津田源兵衛

鹿兒島
久留米
博多
熊本
熊賀
佐賀
松山
丸龜
廣島
秋田
大津
濱松
靜岡
名古屋
水戸

吉田幸兵衛
菊竹書店
森岡書店
芹川書店
大坪萬六
向井藏次郎
鹽田書店
清水庫三郎
清見清兵衛
成見清兵衛
古川伊助
谷島屋
內田仙藏
川瀬代助
市毛淺太郎

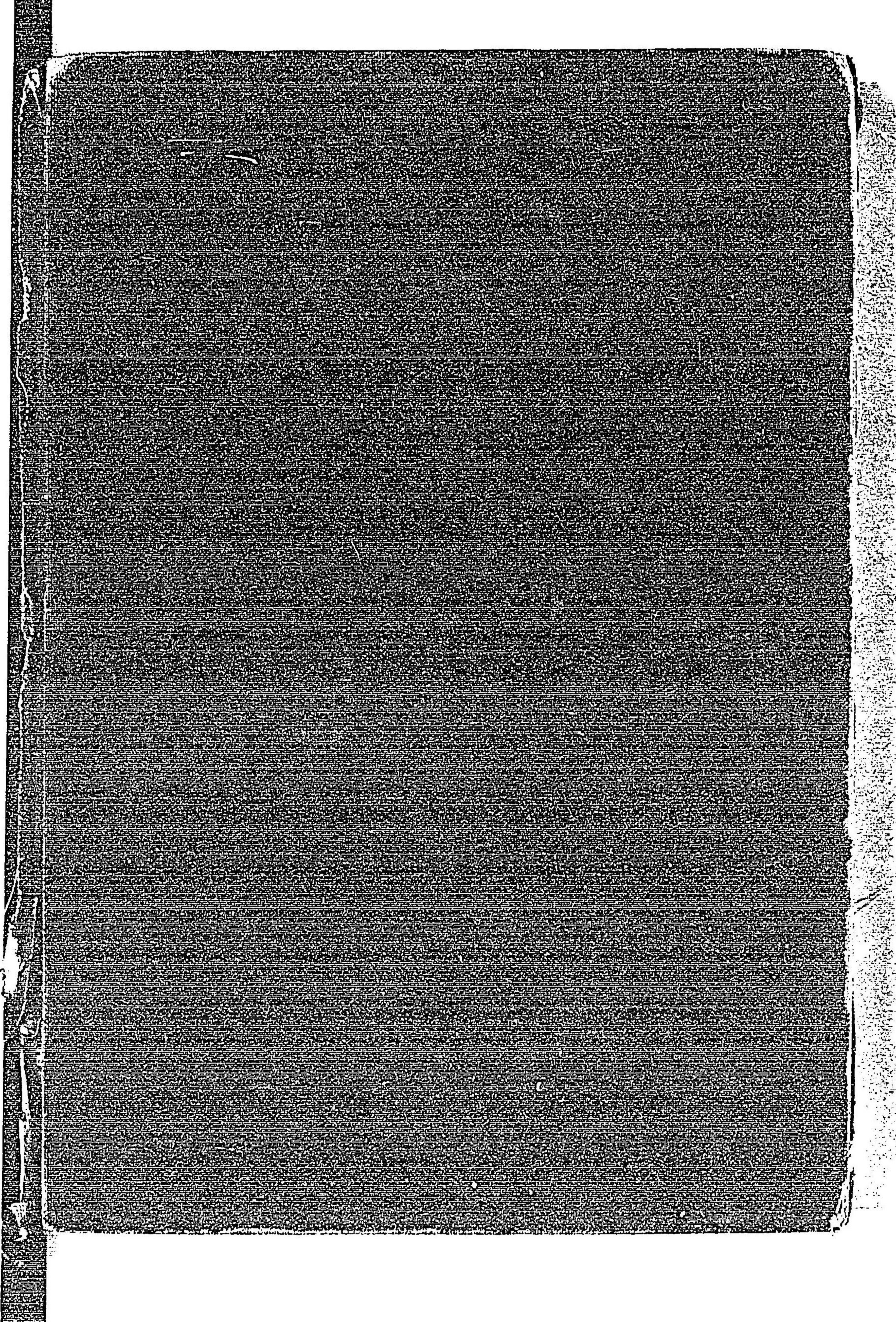
長崎
大分
熊本
熊賀
佐賀
馬關
高松
諏訪
岡山
姫路
京都
掛川
沼津
弘前
仙臺

安中半三郎
甲斐治平
中山知新堂
河內庄助
上野山書店
龜山友堂
日新堂
竹內彌三郎
木村治郎
河合文港
三原堂
文林堂
今泉書閣
有千

特約大賣捌所



29
125



29

125

004607-000-9

29-125

人物の裏面

大月 隆/著

M33

ACE-1208

